

# 来年の約束柚子を撈ぎながら

藤田湘子

秋も深まり、黄熟した果汁たつぷりの柚子を枝先からもぎとりながら、柚子畑を持つ人と何か来年の約束をしたのであろう。「今年は裏年であまり綺麗な実がならなかったけれど、来年は豊作。もつと大きな実がなったら送りますよ」とでも、言ってもらえたのかもしれない。

たったそれだけのことなのだが、飾りもなく実直に、ありのままの様子を伝え、句帳に記録したような一句。

花鳥諷詠とは全く異なる人事なのだが、人の営みの中のほんの一瞬の約束の場。「撈ぎながら」の接助詞で、また上五に返つてリフレインする優しさもある。

大上段に俳句とは、と詠うのではなく、ここにも俳句の種がありましたと拾い上げてきた、そんな趣の一句。

1998年（H10作）第十句集『神楽』 鑑賞・轍郁摩